

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：13902

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720124

研究課題名（和文） ジャーナリズムと文学：ピータールー虐殺事件の受容に関する研究

研究課題名（英文） Journalism and Literature: A Study on the Acceptance of the Peterloo Massacre

研究代表者

江口 誠 (EGUCHI MAKOTO)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：50332060

研究成果の概要（和文）：本研究は、ジャーナリズムと文学という観点からピータールー虐殺事件の受容に焦点をあて、19世紀初頭イギリスにおける様々な言説の把握を試みたものである。主な研究成果は、以下の3点にまとめられる：（1）単著 *Progress and Stasis* の出版、（2）学術論文「サミュエル・バムフォードの詩におけるピータールー虐殺事件」の発表、（3）学術論文「ピータールー虐殺事件と William Hone」の発表。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was, focusing on the acceptance of the so-called 'Peterloo Massacre,' to grasp the various discourses that prevailed in the early nineteenth century England. The main results of the said study are as follows: the publications of *Progress and Stasis*, "The Peterloo Massacre in the Poetry of Samuel Bamford" and "The Peterloo Massacre and William Hone."

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：英文学、イギリス文化研究

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学、ロマン主義、イギリス文化研究、ピータールー

### 1. 研究開始当初の背景

ロマン主義（あるいはロマン派詩人）の文化的な側面に関しては、国内外を問わず1970年代から歴史主義という視点で様々な研究がなされてきた。批評家スティーブン・グリーンブラット(Stephen Greenblatt)が活躍し始めた1980年代以降は、ロマン派研究も少なからず新歴史主義の影響を受けてきており、時代の文化を文学作品の単なる時代背景として捉えるのではなく、文化の一形態として捉える研究姿勢が主流になっている。一例を

挙げれば、1998年には批評家ジェームズ・チャンドラー(James Chandler)が数多くの作家や作品を取り上げ、ロマン派と歴史の関係を整理した。2000年には、批評家リチャード・クロニン(Richard Cronin)がロマン派の詩の政治性に言及しつつ、ロマン派の時代を3つの時期に分け、通時的な観点からそれぞれの時期に表象される優勢な言説を見出した。

そこで本研究では、十九世紀初頭イギリスに於ける象徴的な出来事の一つである「ピータールー虐殺事件」を取り上げ、文化研究の

手法により、散文や韻文の区別なく十九世紀初頭イギリスの様々な文献を精読した上で、「その時代のイデオロギー的な闘争を提示する」ことを目指すものである。

また、申請者はこれまで、ロマン派詩人と称されるジョン・キーツ(John Keats)やパーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley)の詩はもとより、この事件に参加した職工詩人のサミュエル・バムフォード(Samuel Bamford)、さらにはリー・ハント(Leigh Hunt)やウィリアム・コベット(William Cobbett)らにより発行された当時の雑誌を中心としたジャーナリズム研究に携わってきた。なお、本研究は、2009年11月発行予定の著作に収められた拙論「ピータールー虐殺と『無秩序の仮面』」の発展的な取り組みであることを強調したい。

## 2. 研究の目的

本研究は、1819年8月16日イギリスのマンチェスターで発生した、いわゆるピータールー虐殺事件(Peterloo Massacre)の報道とその受容を足掛かりに、文化的な視点から十九世紀初頭イギリスにおけるジャーナリズムと文学との関係を探るものである。具体的には、まずピータールー虐殺事件がどのような形で社会に伝えられたのかを調査し、その事件の表象及び受容の検証から、当時の思想的対立または共存の構図を明らかにすることをその目的とする。

ピータールー虐殺事件とは、1819年8月16日、議会改革や普通選挙権などを求めてイギリス・マンチェスターのセント・ピーターズ広場に集結した女性や子どもを含む数万人の市民のうち17名が死亡し、400名以上が負傷した事件である。歴史家エドワード・パルマー・トムスン(Edward Palmer Thompson)に代表されるように、一般には当時の選挙権運動やナポレオン戦争後の不況等に起因する労働者の不満や不安に対する、政府の厳格な対応がその原因であると考えられている。そしてそれは、事件当時の反体制的なジャーナリズムの報道姿勢とほぼ一致している点に注目したい。一方、歴史家デイヴィッド・キャナダイン(David Cannadine)は、イギリス社会を認識する術として十八世紀初頭から伝統的に用いられてきた、エラルキーモデル・三層モデル・そして二極モデルの三つのモデルは実体とは異なるものであり、「極度に政治化された概念に過ぎない」と主張している。

そこで本研究では、事件に関する一次資料や関連する文献の再検討によって、「労働者階級(市民)」対「政府」という従来の単純な二項対立的な視点ではなく、当時勃興しつつあった中産階級の重要な役割を含めた、イ

ギリス社会内部に於ける複雑な対立の構図を解明したい。

## 3. 研究の方法

本研究は、各種媒体に於けるピータールー虐殺事件報道の検証し、ジャーナリズムと文学との関係から、当時の複雑な力学の構図を明らかにするという二つの柱で成り立っている。

原則として、これらの2つの作業を並行して行う。但し、初年度は、事件に関係する現有の資料以外の収集に専念する。次年度以降は、資料収集に継続して取り組むとともに、これまでいわゆる「文学作品」としては認識されることがなかった無名詩人の関連する作品や各種パンフレットの内容を読み込み、19世紀初頭のイギリスに存在したであろう様々な言説の対立または共存の構図を明らかにする。

(2)平成22年度は、主にピータールー虐殺事件に関連する資料収集を行う。事件に関する報道については、左翼的なウィリアム・コベットの*Political Register*やリー・ハントの*The Examiner*を始め、その他保守的な雑誌や記事など、19世紀初頭に於いて出版されていた主な文芸誌を中心に収集し、その報道傾向を明らかにする。同時期に発行された各種パンフレット、他の雑誌記事、さらには事件に関する議事録及び裁判記録等の一次資料についてもこれらを収集し、十九世紀初頭イギリスに於いて存在したであろう様々な言説を整理する作業を行う。

(2)平成23年度は、前年度から進めている研究手法、つまり、事件に関する主張や思想の収集に引き続き専念するとともに、前年度同様、関連する同時代の文学作品及び雑誌記事等の精読もこれを継続して行う。ここで得られた研究成果を論文にまとめて発表する。

(3)平成24年度は、前年度までの資料収集や研究で得られた成果をもとに、本研究の第二の目的である、ジャーナリズムと文学との関係についてまとめる作業を行う。

## 4. 研究成果

(1)平成22年度は、1819年8月にイギリスのマンチェスターで発生したピータールー虐殺事件に関連する資料収集を行った。この事件に関する報道については、左翼的なウィリアム・コベット編集の雑誌*Political Register*やリー・ハント編集の雑誌*The Examiner*をはじめ、その他保守的志向の雑誌

や記事など、19世紀初頭イギリスに於いて出版されていた主な文芸誌を中心に収集し、その報道傾向を明らかにした。同時期に発行された各種パンフレット、他の雑誌記事、さらには事件に関係する議事録及び裁判記録等の一次資料についてもこれらを収集し、十九世紀初頭イギリスに於いて存在したであろう様々な言説を整理する作業を行った。

議事録、発行部数が極端に少ない貴重なパンフレットや公開書簡など、日本国内では入手または閲覧が極めて困難な資料については、在外研究の際にも頻繁に利用した題詠図書館(British Library)あるいは各大学図書館など、イギリスの図書館や資料館に直接赴いて収集する予定であった。しかしながら、諸事情により当該年度の渡英が不可能となったため、日本国内において可能な限り資料収集を行った。

また上記の作業と並行して、本研究のもう一方の柱である、関連する十九世紀初頭のイギリス・ロマン派の作品及び雑誌記事の精読も行った。そこから、P. B. シェリーやジョン・キーツを含めた同時代詩人や作家、ジャーナリストらの個々の思想の特徴を見だし、事件に関する様々な主張や概念の整理を始めたところである。その成果として、同年度内に査読付論文を発表することが出来た。

本論文では、キーツのフランスやその他の国々やその文化への言及から窺い知ることができる彼の自国文化への想いや自国意識に焦点を当て、「徹底した保守(伝統)主義者」(“hard-core traditionalists”)の傾向が後年さらに強まったのではないかという点を明らかにした。

(2)平成23年度は、前年度から進めている研究手法、つまり、ピータールー虐殺事件に関する主張や思想に関する著作等の収集に引き続き専念するとともに、前年度同様、関連する同時代の文学作品及び雑誌記事等の精読を継続して行った。その研究成果として、計2本の論文を上梓することができた。

一つ目の論文では、19世紀初頭イギリスにおける社会改革の一翼を担ったサミュエル・バムフォードが残した詩の中から特にピータールー虐殺に関係するものに注目し、詩作とイギリス社会との関わりという観点から、特にその内容の修正に着目して詳細な分析を行った。その結果、それらの詩が時代の変化、社会情勢及びイギリス政府の対応と無関係ではなかったことを明らかにすることが出来た。さらには、当時のリバプール内閣の数々の無慈悲な言論弾圧政策が、彼をはじめとする言論人や急進主義者らに心理的に極めて強い影響を与えていたのではないかということが確認された。

二つ目の論文は、19世紀初頭イギリスで活躍した風刺作家ウィリアム・ホーンの政治パンフレットを取り上げ、登場する幾つかの抽象的なイメージや人物に着目しながら、その作品が発売された文化的背景について考察するものである。風刺作家ウィリアム・ホーンの数ある著作の中から、事件に最も関連した『ジャックの議会』(*The Political House that Jack Built*)に注目し、登場する象徴的なイメージや人物像を取り上げ、当時の文化的な背景に迫るというものである。その結果として、この作品は、事件の悲惨さや庶民の貧困の原因などを伝えるという主要な目的を有しながらも、ホーンはその目的達成のために、当時の特異な販売網、人気を博していた版画家ジョージ・クルックシャンク(George Cruikshank)の挿絵、及び当時の話題や流行を巧みに利用していたことが明らかとなった。

(3)平成24年度は、前年度までの資料収集や研究で得られた成果をもとに、本研究の第二の目的である、ジャーナリズムと文学との関係についてまとめる作業を行った。事件後、例えばイタリアでその一報を聞いたP. B. シェリーは、『無秩序の仮面』(*The Mask of Anarchy*)と題した仮面劇を書き上げた。この作品は同時代に出版されることはなかったものの、そこからは、彼が文学によって自ら社会変革を実践しようと試みた有様を読み取ることができる。一方、イギリス国内で事件を知ったジョン・キーツは、シェリーとは対照的に、直接事件に言及する作品を発表することはなかった。しかしながら、批評家ニコラス・ロウ(Nicholas Roe)は、キーツの有名なオードの一つである“To Autumn”とこの事件との密接な関わり、即ち、詩人によって意図的に「言及されない」がために生じる、逆説的な意味での詩の強い政治性を指摘している。

そこで本研究では、この対照的な二人のロマン派詩人の作品研究を始め、その他、ピータールー虐殺後に書かれた同時代の様々な作品にも注目し、当時のジャーナリズムが文学(あるいは文芸文化)に与えた影響を詳細に検証した。そして、体制的または反体制的な言説という単純な分別ではなく、さらに微細に言説を分類化することによって、十九世紀初頭イギリスに於いてジャーナリズムや文学が果たした役割と力学の構図の解明を試みた。以上の研究成果として、平成24年度は単著を上梓することができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 江口 誠、サミュエル・バムフォードの詩におけるピータールー虐殺事件、愛知教育大学『研究報告』人文・社会科学編、査読無、第61輯、2012、51-56
- ② 江口 誠、ピータールー虐殺事件と William Hone—*The Political House that Jack Built* 創作の背景—、愛知教育大学『外国語研究』、査読無、第45号、2012、85-100
- ③ 江口 誠、ロマン派の時代と自国意識—キーツのイギリス—、『英詩評論』、査読有、第26号、2010、55-65

〔図書〕（計1件）

- ① 江口 誠、Parade Books、*Progress and Stasis: Political Keats in Early Nineteenth Century England*、2013、102

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

江口 誠 (EGUCHI MAKOTO)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：50332060

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし